

リトアニア旅行記

長野県丸子実業高等学校 山崎義幸

2004年1月2日から7日まで日本人があまり行かないリトアニアへ行って来た。今回の私の旅行目的は首都ビリニュス市内の様子を知ること、個人的な平和学習として、杉原千畝が活躍したカウナスの旧日本領事館、現在の杉原記念館を訪ねるというものだった。短い冬休みの6日間しか滞在できないことから訪問する都市を2つに絞った。

日本人の場合、90日以内の滞在なら観光ビザも要らないので、旧ソ連というイメージがほとんど薄くなった「容易に行ける国」になっている。経由地から乗った航空機内からビリニュス着陸直前に見た風景は一面雪景色である。

I ビリニュス滞在

ビリニュスの空港で入国審査を終えて出口を出ると、花を持っている人が多いのに驚く。入国した知人に贈るためである。日本では、あまり見られない光景である。周りをよく見ると花屋があり、気に入ったものが簡単に買える。昼時でも氷点下の寒さの中で温かみを感じられた。

空港はビリニュスの市街地から南に約4km離れているため、バスに乗って向かった。窓から見ると、ヨーロッパ諸国や韓国、そして日本などの外資系企業の看板があり、リトアニアに進出しているのがよくわかる。1991年の独立以来、「西側資本」を受け入れていることを考えると、旧ソ連ということを忘れてしまうくらいである。

しかしながら、煙突がある工場を見ると設備の古さが感じられ、社会主義時代の面影を残しているところもあった。独立後10数年の期間では、ま

だ社会主義の名残りが見られて、古めかしさがうかがえた。となれば、資本主義国内にある工場の外観との違いを知ることが可能である。

市街地の中心部は「旧市街」と「新市街」に分かれている。旧市街には国民の多くが信仰しているカトリックの教会がところどころにあり、「十字を切る」信者を見かけることもあった。新市街はビジネス、ファッションの街といえるほど西ヨーロッパの都市と似ている。周辺部はマンションが何棟も立ち並んでいる地区が多い。また、各地区の町並みはレストランやスーパーマーケットといった生活するのに事足りる程度の施設くらいしか見られなかったことから、職住近接の例となるイギリスのニュータウンとは違うように思う。しかし、中心部



旧市街の大聖堂



テレビ塔から見たビリニュスの風景

から近いわりに樹木や広場をよく見かけたので、自然が豊富という印象を受けた。各地区を結ぶ主たる周辺道路は2、3車線もあったので、アメリカ合衆国のハイウェイを思わせ

る。

空港からある路線バスに乗ると、中心部の北方のとあるマンション群があるところが終点



ビリニュスのハイウェイ

だった。リトアニア語がわからない私は運転手のジェスチャーで終点だとわかり、降りて町中を歩いてみる。辺りは雪が積もり、道路や歩道は圧雪であった。歩いている途中で2人の小学生くらいの子どもたちが珍しそうに私を見ていたので、英語で話しかけたが、通じなかった。せっかくなので、周りの看板や標識の読み方を確認してもらったあと、お礼を言って別れた。ちなみに2人は「はい」の答え方からロシア人ではないかと思った。

Ⅱ 杉原千畝ゆかりの地、カウナス

私個人の平和学習として、ビリニュスから約100km西方の都市、カウナスへ行った。この都市はユダヤ人約6000人をナチスドイツから救うために「命のヴィザ」を発給、「日本のシンドラー」と呼ばれる故杉原千畝氏が勤務した当時の日本領事館が置かれたところである。

カウナス市の高台にある住宅街の中に領事館だった建物があり、現在は杉原記念館と日本語教育センターの2施設が入っている。建物は現在老朽化のため改装が必要であるが、資金が足りず寄付を募っている（詳細はホームページ<http://www.geocities.jp/lithuaniasugiharahouse/>を参照）。

私が訪れたときには、現地の館長さんをはじめボランティアスタッフの方々、そして日本人スタ

ッフの飯田英司さんが携わっておられた。現地スタッフの中には日本語を話す方がおり、私はとても嬉しい気持ちになった。

館内には杉原氏が実際にビザを発給したときに使用した机が置かれており、当時の状況をしのばせる。また彼の功績をまとめたビデオを日本語で視聴をすることが可能である。展示物は彼の偉業を記したものをはじめ、修学旅行で訪れた高校の生徒たちが作成した模造紙の展示もあった。

前述のとおり、杉原記念館の建物には日本語教育センターが置かれており、日本語の書物をはじめ、NHKの国際放送が視聴できる設備があって教育環境はよい。リトアニアでの日本語教育として重要な役目を果たしており、また地元カウナス大学日本語学科の講義でも使われている。

杉原氏は多くのユダヤ人を救ったことで、イスラエル政府はその功績を讃えたが、そのことについては地元の人たちも考えは同じであり、とくにスタッフたちも杉原記念館の将来について、真剣に話していたことからそれがうかがえた。日本語教育も彼の偉業のおかげであろう。

Ⅲ まとめ

今回は短期間で行ってきたため、ビリニュスの全体像を十分に見ることができなかったので、新旧市街の中をもっと観察してみたいと思った。

また杉原氏の功績を直に触れることができたことで、人の命をより考えるようになった。世界にはさまざまな民族や思想、宗教がある。その中で戦争があり、現在でも犠牲者がいることは悲しいとしかいえない。平和というものをもっと理解できるように地理教育を生かすにはどうしたらよいか、改めて考えさせられる旅であった。